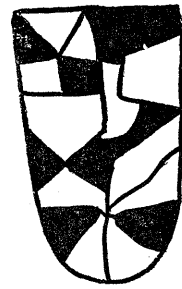


わたくしの
シルクロード ⑧



横張和子

シノ・イラニカ錦

前回、掲げた法隆寺蔵の四騎獅子狩文錦は藍地に大ぶりの珠文を連ねた円環の中に、一本の果樹を中心にして、その左右に三日月と鳥翼の冠をつけ、天馬に騎乗して、弓を放つ貴人の狩猟のさまを織り出しています。その胡人の相貌から、これはササン朝ペルシアのホスロー二世（在位590～628）とその愛馬をモデルにして製作されたという説もあったことはすでに述べましたが、これを東京三鷹の中近東センター所蔵のイラン・ギーラン州出土の銀

製皿の帝王狩猟図と比較してみましょう。（図版①）大宛（フェルガナ）の汗血馬を思わせる精悍な駿馬に騎乗した両者の鼻高く、濃い髻をたくわえたプロフィールはきわめて酷似していて人種的な共通点では一致します。頭上にのせている大きな球体をのせた城壁冠からこの騎馬人物はササン朝十代の王シャール二世（在位309～379）の狩猟を描くものと解されています。帝王の姿はかりでなく、筋肉の緊張感をみながらさせた獅子の描写についても酷似した手法です。錦では馬腹に漢字がみえていて、これが中国人の手になることは間違いないところですが、おそらく錦の意匠家はこうしたペルシアの銀製皿を手許において図案化を練ったもので

しよう。中国化は処々にみられるところですが、今回はこの錦に盛り込まれたイランモードのいくつかを探ってみましょう。

まず相対する騎馬人物の間にすえられた一本の樹木からみていきます。樹は下方に広がる数枚の葉の上に赤い果房をのせてこんもりと繁り、そのまわりに鳥が飛び交っています。それは先にあげたシノイラニカ錦の樹木に共通していますが、赤い果房は葡萄の実をあらわすものでしょう。かなり観念的になっていて仏教美術にみられる菩提樹のようになっています。それは中国化のあらわれの一つでもありましょう。一本の樹を中央にすえて、その左

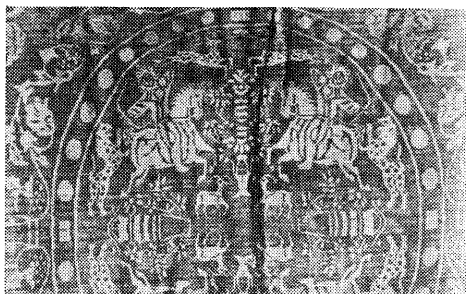


▲図版① 帝王狩獵図銀製皿

中近東センター所蔵

右に動物を配する図様は古くから西アジアでは行なわれていました。イラン高原では農耕と牧畜の生活が始まると、それを左右する季節と天候とは人々の最も重要な関心事となりました。ことに乾燥を恐れた人々にとっては雨水の源泉である天空に対して、つねに心をくばり、天空神アフラマズダにむかって、慈雨の恵を祈願する声は切実でありました。その願望の中にやがて天空には雨水を貯える大海や天空の水の湧き出る泉があるとか、さらにその海の中にある山には聖なる月の樹があるとかいう信仰をもつようになりました。この海あるいは泉には一本の聖なる木があり、その名をハオマまたはガオケレナと呼ばれました。ハオマは葡萄の木のこと、それから搾った液（葡萄酒？）を飲むと不死の生命を得るといふ生命の木です。ガオケレナは「牛の角」という意味で、これは天空に蒼く光る三日月の形が牛の角に似たところからきていて「月の樹」の意味となっています。イラン創世紀（アヴェスター）では月は水を与えるものとしてたええられています。三日月型の宝飾がササン朝の帝王の冠に飾られる時には「月の樹」の意味がこめられていると考えられます。

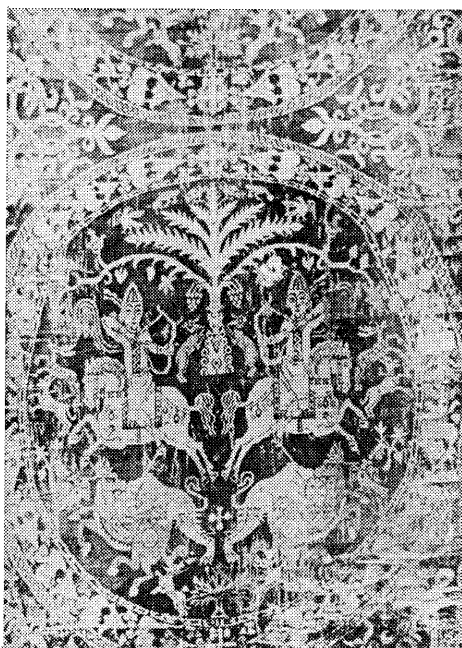
次は狩獵文です。初唐の名将であった李靖という人の紫の衣の文様は「上に林樹、その下に馬を馳せて射るものがあり、またこれに雜えて狻猊（獅子）、狗、駱駝などがあった」ということで



▲図版② 四騎獅子狩文錦

奈良正倉院（複製）

すが、わが正倉院蔵の碧地狩獅文錦の図柄はほぼこういった情景を織り出しているものでしょう。（図版②）葡萄唐草と連珠文の円文の中に聖樹を中心に、馬上から振り返りざまに襲いかかる猛獣を騎射しようとする胡人を描き、そのまわりに野羊や鹿をまじえそれに草木などを配しています。法隆寺錦と共に東方における狩獅文錦の好例ですが、これらによく比べられるものにヨーロッパの古いキリスト教寺院に伝えられ、世に出た両方の狩獅文錦があります。それらがササン朝のペルシアで製作されてヨーロッパに

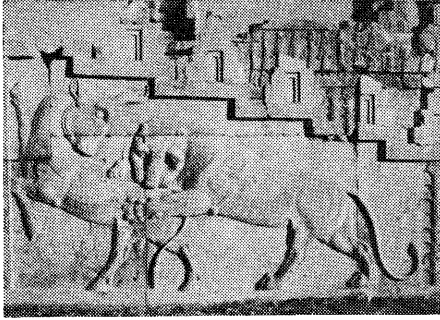


▲図版③ パフラム・グールの狩獅文錦

ドイツ ケルン大聖堂所蔵

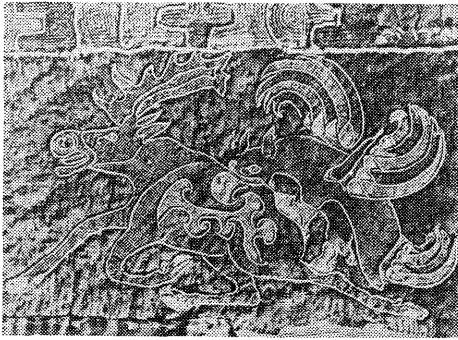
運ばれたという確証はなく、むしろビザンチンやシリアあるいはエジプトのアレクサンドリアで製作されたもので、九世紀ごろから聖人の遺物と共に教会に納められたものです。その一つにパフラム・グールの狩獅文錦というのがあります。（図版③）グール（ろば）という異名をつけられたパフラム五世はろばに襲いかかる獅子を射殺した武勇伝とその恋愛の物語で古来ペルシア人の称賛を得ているササン朝の王ですが、ここでは中央におかれた聖なる樹は西南アジアのオアシスの人々の生活の樹とも言われる棗椰ちやう

子です。円帯を飾る模様もエジプトのコプトの織物にみえるハート形の花模様であることなど、法隆寺錦など東方の錦とはかなり趣きを異にしています。銀製の皿の狩獵図のような気迫も薄れてしまっているのは、おそらく初めの錦の度重なる模写のうちに徐々に変化してしまったからでしょう。しかし騎馬人物の下方に鹿を襲う獅子の図が描かれているのは興味深いことです。弱い動物が強い猛獣に襲われるということは、西アジアの荒野では普通のことであったのかもしれませんが、そうした弱肉強食の動物の闘争

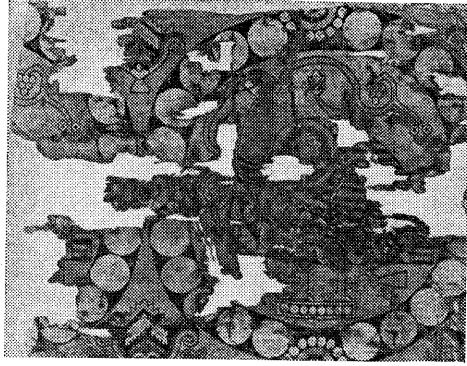


▲図版④ 一角獣をおそう獅子の図
ベルセポリス

の場面を単に写したものとするよりは、なにか神聖な力の闘争を意味したようです。古代のイランの人々はこのモチーフを季節の交替をあらわす象徴としたのです。乾いて澄み切った空気の夜空に輝やく星座の出現に関連づけて、獅子座を夏至、山羊座を冬至、牡牛座を春分として、例えば獅子が野羊を襲うのは冬が終りを告げて夏にむかうことをあらわしていたのです。アケメネス朝の王都であったベルセポリスの遺跡の謁見殿（アバダーナ）の正面階段には獅子が一角獣（雄牛か？）を襲う図が浮彫であらわさ



▲図版⑤ 動物闘争文
刺繍 イラン ウラ出土



▲図版⑥ 昨鳥文錦

ローマ ヴァチカン美術館所蔵

れています。(図版④) それは古代イランにばかりあったのではなく、広くユーラシアのステップの民族の間に盛んに造型化されてきました。(図版⑤) それがなおビザンチンやシリアの錦文に息づいていたとみることができでしょう。

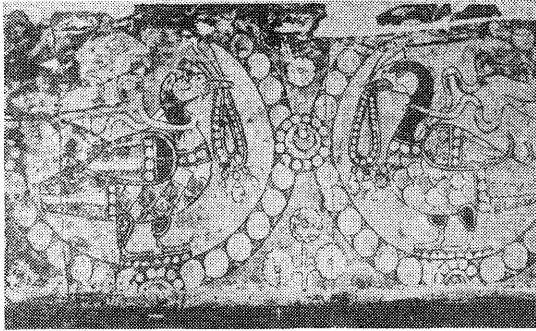
狩猟は人類の生活の技術として非常に古くからあったことで、そのさまを描写することは原始芸術以来みられます。獅子狩といった特殊な狩猟も前七世紀の好戦的なアッシリアでは戦闘の訓練



▲図版⑦ 猪頭文錦

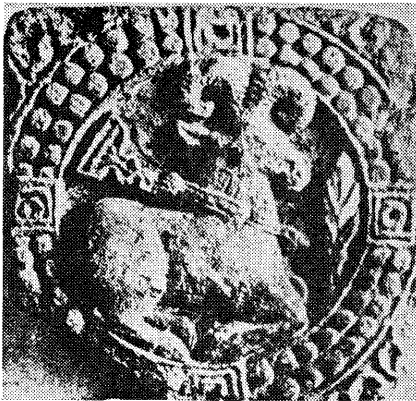
として獅子狩を行ないましたし、後漢代にはその朝廷にパルティア王国から二度にわたって獅子が献上されているので、イラン高原からメソポタミア地方には、むかしかなりの獅子がいたものと考えられます。そのためか、古代オリエントには獅子が怪獣を退治するモチーフがありました。この場合狩猟するものは太陽神シヤマシユかギルガメシユのような神話的な英雄で、狩猟文は神々や英雄の権威的なものの象徴でありました。ダリウス大王の印象

には馬車から獅子狩をする光景とこれを祝福する天空神アフラマズダと二本の聖樹があらわされています。ササン朝の歴代の王はアケメネス朝以来伝統の国教であるゾロアスター教の最高神であるアフラマズダにより地上につかわされた支配者であると信じられていましたから、帝王の獅子狩はその権威にもっとも適わしい姿とされたのでしょう。



▲図版⑧ 昨鳥文を描く壁画

トルファン・キジル最大洞



▲図版⑨ ストゥッコ浮彫

クテシフォン出土 ベルリン
カイザーフリードリッヒ美術館

ところでギリシアの史家ブルータルコスは北西イランのメディアにアルタクセルクセス大王の王室の遊園があったことを述べています。そこには美しい花の咲く草木や果樹が植えられ、こんこんと清水の湧く泉や池があり、水鳥や鳥が泳ぎ、各種の動物が多数放し飼いされており、時折、大王はここへ来て、遊園を楽しんだといっています。この庭園のことをバイリダエザといったそうです

が、それがギリシア語のバラダイスの語源だそうです。

ビザンチン製のバフラム・グルルの錦の図様がにぎやかで華やいでいるのも、そうしたバイリダエザの狩猟を描くものであったのかも知れません。

法隆寺錦など一連のシノ・イラニカ錦では円文のぐるりを取り巻く連珠文の帯が特徴的なものの一つにみなされています。連珠文はベルシア系の美術に頻繁にあらわれてきて、あたかもそのトリードマークのごときですが、珠文は真珠をあらわしていることは容易に考えられます。古来ベルシア湾は真珠の名産地でローマの著述家プリニウスは月夜の晩に海上に浮かび上った貝が開くと、天空から露がおりてきて真珠になるのだと信じています。月の雫が真珠となるのです。それゆえ古代のベルシア人は真珠は天空の聖なる水あるいは火から生まれてくるのだと信じていました。真珠は中世ベルシア語でゴーフルといい、現代ベルシヤ語ではゴウハルすなわち寶石の意味となっています。しかし本来は原質すなわちすべてのものの元素という意味であったのです。だから聖なる水、聖なる火で、いわゆるフヴァルナと呼ばれる光明そのものにほかならなかったのです。フヴァルナはあらゆるものを生み出す原動力であり、真珠はその実体であったのです。フヴァルナはまたササン朝の王の栄光そのものでありました。それゆえ

真珠はもともと神聖な宝石として王冠の宝飾となり、また高貴なものシムボルとしてその首飾りになったのです。

連珠文はベルシア産とも考えられているヴァチカンの昨鳥文錦(図版⑥)、トルファン、アスタナ出土の猪頭文錦(図版⑦)、それに法隆寺錦の天馬に瓜二つのエジプト・エンチノエ出土の天馬文錦などの錦の円環を飾っていますが、円環の四方には再び小連珠文の円環があつて、内文に三日月がおかれています。それはキジールの洞窟の壁画にも描かれていて東方への波及を確実に伝えるものです(図版⑧)、やがて三日月文に替つてその位置には四角形の角文がおかれるようになります。連珠文と角文の組み合わせはベルシアになくはないのです。クテシフォン出土のストウッコ浮彫(図版⑨)やベルリンの織物美術館所蔵の野牛文錦にもみられますから、これもベルシアに起源をもつものといつてよいでしょう。しかし法隆寺錦に至つてはもはやベルシアの象徴的な意味にはさほどの意義を見出さず、むしろ積極的には意匠としての洗練が優先されたのでしょう。ベルシア文様を織りながら、単なる模倣におちいらず、端正な折り目正しいその意匠はさすが絹織物に長い歴史をもつ中国人のすぐれた力量であると思えます。この稿は、恩師筑波大学教授林良一先生の御指導を得ています。

(山脇女子短期大学)